

5. 今後の展開

(1) 活動について問題となった点

・ 森（里山や竹を含む）を、身近に感じるための、「森(里山)の情報インデックス」が必要

近年、まちの人の「森（里山や竹を含む。以下同じ）」に対する関心の高まりに呼応して、「森林インストラクター」や「山の案内人」等の指導者認定の制度も生まれ、森林ボランティアの活動も盛んになってきた。以前は山への関心は、森林浴など自然の恵みを楽しむことでしたが、最近では、「水源地域の保全再生」をキーワードに、自分達で森林の再生をしようという活動を始め、多種多様な取り組みが生まれ始めた。

そうした多様な取り組みをする団体等の活性化に伴い、求められる「森に関する情報」も、急激に多様化・個性化が進んでいる。景観・自然保護・草花・リフレッシュ・ボランティア・体験学習・木工・木材・音楽会・彫刻展・観光・山菜取り・インストラクター等々、森林を活用したニーズは広がってきている。このような多様化・個性化の進展に伴ない、共通して一番ほしがるのが、各人の個性的なニーズにマッチした情報である。

例えば、森林や里山をキーワードにインターネットで検索すれば、一日中見ても対処しきれないほど沢山のホームページが案内される。高度で専門的情報が詰まっている行政や各種関連団体・企業・大学・交流団体等を始めとするホームページもあり、インターネットでは、既に、情報過多状態になっている。

しかし、実際に何か調べようとすると、自分が望む情報を入手することは極めて困難である。これは、情報を発信する側が、発信できる情報を、発信側に都合の良い情報分類により、効率よく発信することのみで満足していて、どんな情報がどのような形で求められているのかへの関心が無いことの現れかもしれない。

そのため、求める方は知りたい情報に、なかなかたどり着け無いために多大な無駄な時間を費やしてしまう。しかも、それでも結局情報が入手できなくて、単なる徒労に終わってしまうことも珍しくない。このようなことで、せっかく芽生えた山への関心が消えてしまうことにでもなったら一大事、早急に対策が必要である。

そこで、せっかく芽生えた山への関心を大切に育むためには、至急、「森の情報インデックス」とでも言うべき情報窓口の開設とその存在の広報が欠かせない。

ここで言う「森の情報インデックス」とは、森(里山や竹を含む。以下同じ)の情報を求める人が、知りたい項目からすばやく検索できるように、氾濫しているだけで使えない発信者情報を、求める側の視点で逆分類し、分厚い本の中から素早くほしい情報をさがすための道しるべとなる「インデックスのような情報窓口」であり、溢れる情報を効率よく処理する集線基地(ハブ)のような役割を果たすものである。

森林に関心を持ってもらうための第一歩として、「森の情報インデックス」の開設、運営は、よりよい広報活動となりうる。

(2) 今後の展開として予定又は検討している内容

- ・住民が、居住地周辺の防災に関心を持つキッカケづくりとなることを目指した、地域住民との協働による、「大縮尺の防災マップ」の作成及び広報のための各種活動
- ・市民が、里山(竹を含む)に関心を持つための、「高知里山祭り」の共催活動
- ・市指定の第1項の里山保全地区である秦山の、竹林の管理・活用する活動
- ・「牧野植物園」が、県民の身近な自然環境体験スポットとなることを目指した、当会内の「植物園の支援に関わる専門部会」である「牧野活用交流会議」の、次の活動

高知NPO「高知里山ファンクラブ」の「植物園の支援に関わる専門部会」 「牧野活用交流会議」15年度事業計画書

(1) 県市民に向けた活動提案

- ・「牧野植物園」を知るキッカケ作りとなる、小山園長の講演会等の開催を行います。
(イベントのための資料収集・チラシの原案作り・印刷(500枚)-15万円)
- ・季節に合わせたイベントの開催を行います。
(世界の植物園や、植物の名前のつく音楽会 2回 特に今回は、セミプロ参加により機運を盛り上げる機材搬入、撤去、運搬、公演料、-50万円、
イベントのための資料収集・チラシの原案作り・印刷(500枚)-計65万円)

(2) 学校・子ども達に向けた活動提案

- ・夏休みの期間、植物園の施設や植物を使ったワークショップの開催を行います。
(イベント準備・当日の準備、資料の収集、資料の配布、保険、報告書、チラシ、バス代、他、
年間4回-61万円 計約250万)
- ・総合的学習の時間等に、植物園を活用してもらうための広報活動と支援を行います。

(3) 県市民への意識高揚

- ・機関紙を発行して広報及び啓発活動に努めるとともに、各種報道機関を通じての機運の醸成にも努めます。(カラー印刷、写真代、現像代、構成、郵送代-年8回-21万円 計168万円)

(4) ボランティア団体へ向けた活動提案

- ・協力ボランティアの参加を呼びかけや情報・意見の交換会を行います。
(資料収集、印刷、通信費、印刷、会場費、年8回-40万円)

(5) 植物園へ向けた活動提案

- ・現在使用中の植物紹介プレートについても、季節に関係なく来園されてもより解りやすい内容に変更するため協議を行います。(今回5枚プレート代、取り付け材料費-25万)

(6) 子どもも活用できる稀少植物のデータ-ベースの作成

- ・研究用や大人用のものはあるが、一番知ってほしい子どもたちが使いやすい内容と資、学校などで使用してもらうようにする (300枚データ-ベース作成-200万円)

・里山(竹を含む)に関わる活動団体との相互交流活動

・里山に関する、国・県・市町村の行政担当者や専門分野の方との情報交換及び収集・整理

・里山保全整備基本構想の策定と官・学・民それぞれの役割分担の検討

・「里山シンポジウム」の開催等による県民市民の意識高揚の支援活動

・ 里山の活用促進のための、「学校林」や「市民の森」の指定促進の支援

現代の子どもたちは、野外で遊ぶこと、集団で遊ぶことが減ってきている。一方、地球環境問題等に対処していく上で、子どもたちの自然体験、自然学習の重要性はますます増大してきている。

身近な自然空間である里山は、環境・歴史・自然・産業・地域学習・防災など様々な学習に発展させることができ、「総合的な環境教育の場」として絶好の要素を持っている。そこでは、自然の仕組みとそれに関わる人間の暮らしについての認識を深める環境学習プログラムの創出や自然環境あふれる安全な遊び場の創出など学校の中だけでは期待できない多様なプログラムが可能である。

しかも、「学校林」として指定することにより、特定の森(里山や竹林を含む。以下同じ)として継続的に関わることが出来、「自分達の森」という思いが芽生える。長期的展望での自主的な活動が生まれるなど、その総合的学習効果はさらに高まることが期待される。このことは、子ども達にとって、総合的学習の目指す自ら考え行動できる「生きる力」を育てていく良い教材となる。また、この「学校林」を媒体として、保護者や地域の人が学校や教職員と交流することで21世紀をになう子ども達をともに育てていくことができる。

このように、身近な里山を、「学校林」として指定することは非常に有効であり、それは、家族を中心として地域住民で活用する「市民の森」についても同様の効果を生むことが期待できる。

・ 「森の案内人」等の育成活動の支援

森林についてより学ぶためには、直接山に入ることは不可欠である。

しかし、山の持ち主や水源地域の住民は「山のことは知らないし面識のないまちの人」が、勝手に自分達の山に入るのを望まない。しかしながら、「信頼できる人」の同行という条件がつけば、賛同が得られる可能性が飛躍的に高まることが期待できる。

また、まちの人がより良い経験が心に残るためには、ただ山に入り、勝手に山を見るだけでは、そのような経験をえられる可能性が低い。限られた日程の中での体験ながらも自然に対する「感動と驚き」、「恐れと敬意」を知るために、地域を熟知した経験豊富な人の案内が必要である。

現在このような、山の持ち主や水源地域の人に安心感を与え、まちの人に保全したいという気にさせる、そんな手伝いをしてくれる専門家として「森林インストラクター」や「森の案内人」がいる。

彼ら「森林インストラクター」や「森の案内人」の主な仕事は、「森林(里山や竹を含む。以下同じ)を利用する一般の人に森林や林業についての知識を与える」と共に、「森林の案内」や「森林内での野外活動の指導やアドバイスを行うこと」などとされ、活躍する分野は様々で、初歩的な生物の観察から地球規模の環境問題まで多岐にわたっている。

このような専門家は、今後多くの県民が森林(里山や竹を含む。以下同じ)に関心を持つことに伴って需要も増えてくることが考えられるため、県民が手軽に活用できるよう、十分な人数の専門家を早急に養成していく必要がある。そのためには、長年山にかかわってきた経験豊富な林業関係者や、山菜取りや魚釣りなどの水源地域における楽しみ方に詳しい人などとの協力体制の早急なシステム化が大切である。

・ 「森林コーディネーター」育成活動の支援

自然や森林(里山や竹を含む。以下同じ)について多様で豊富な知識や経験に基づき、地域の資源というべき豊かな自然を興味深く伝えることができる人材と、そこを訪れた人に、「驚きや感動、そして自然に対する畏敬の念」を与えることのできる場をコーディネートできるスペシャリストはこれからの地域を活性化するための「カギ」である。つまり、「森林コーディネーター」ともいうべき人材の育成は今後地域にとっては不可欠である。

このような「森林コーディネーター」は、森林を訪れる人と同様の視点を持ち合わせていないと今まで、資源として認識されていなかったものに付加価値を見出し地域産業の創設につなげて行くことは難しい。

今まで中山間地域は、「地域住民の生き生きとした笑顔や人情・素晴らしい自然」を、ボランティアやエコツーリズムで訪れた人々に安らぎと温かさとして与え自然や地域の文化と触れ合う機会を提供してきた。「与えるだけの地域」であった。これからは、地域の暮らしがより豊かになり、地域社会の雇用の機会を創造できる「与えられる地域」として転換していかなくてはならない。そのためには、多彩なマネジメント能力を持ち、資源としての自然を鳥瞰的に見、企画・立案・運営できる「森林コーディネーター」への育成の支援は重要といえる。

さらに、このような人材に関しては、地域の自然に詳しく尚且つ、訪れる人の視点にあった取り組みのできるUターン者や、参加した都市の住民が、中山間地域の自然や活動に触発され地域住民と共に活動するIターン者など、直接的あるいは間接的に雇用が生まれる可能性を秘めている。田舎に人が帰るキッカケとしても期待でき、結果地域の活性化も期待できる。

・ その他